

I サムエル 15 章「主の御声に聞き従う」

私たちはみことばに聞き従うことが大切であると繰り返し教えられています。そして、自分がみことばに聞き従うことができるように願い、祈り、生活しています。その中で、自分の不十分さを示されることがあります。けれども、自分を正当化していることがあるかもしれません。それは主の喜ばれることではありません。

1. 主の命令に対して（：1～9）

ギルガルでサウルに対する主のさばきを告げた後、サムエルはしばらく離れていましたが、ここで再びサウルの前に来て言いました。1 節。

主が選び、主によって立てられたことサウルに思い起こさせています。主の民は、特に民の代表である王は、主のことばに聞き従わなければなりません。確認した上で主の命令が告げられます。2～3 節。

出エジプトの時にイスラエルを苦しめたアマレクを聖絶することが命じられました。時代を経た今、サウルが王として実行するようにと命じられたのです。ただし、このような命令は神だけが出すことができるものです。復讐を宣言する権利は人にはありません。アマレクは確かに主の敵なのです。主がさばかれるのです。

「聖絶」ということは現代人には受け入れ難いことです。聖絶とは、神の聖さ、正しさという御性質に関わることであり、信仰がないと受け止められないことです。また、聖絶は神の民のためでもありました。異教徒を残しておくなら、その影響を受けてイスラエルが偶像礼拝に陥ってしまうので、そうならないようにすべて滅ぼすのです。

サウルが兵を集めると 21 万人も集まって来ました。その兵たちを率いてサウルは、南のほうの砂漠地帯に住むアマレクと戦うために出て行きました。その時にサウルはケニ人たちに好意を示しました。6 節。ケニ人はアマレク人とは対照的に、イスラエル人に親切にしてくれたと言っています。

ケニ人が離れた後に、サウルとイスラエルの兵たちは、圧倒的な戦力でアマレク人を討ち、命令の大部分を実行しました。8～9 節。聖絶が命じられたからには、同情したり惜しんだりして残しておくことは許されません。サウルは主の命令を自分なりに解釈しました。それが彼の問題の根源でした。

2. 主のことばを退けた（：10～23）

主はサウルと兵たちの行動と心の思いをご存じでした。主はその点をあいまいになさらず、サムエルに主のことばがありました。11 節。主ははっきりとサウルの罪を指摘しました。主に背を向けたと強い表現で言われています。主に背を向けることが人の罪の根本です。

それゆえ、主はサウルを王に任じたことを悔やむと言われます。神が「悔やむ」という表現の中に、神の悲しみが表されています。サウルがご自身のことばを守らなかったこと、その罪に対する悲しみです。

夜通し主に向かって叫んだサムエルは、翌朝、サウルに会いに行こうとします。すると知らせがありました。この戦いの勝利は主のさばきを表すもので、主が与えてくださった勝利です。けれども、サウルは勝利の喜びから、自分のために記念碑を立てたというのです。そして、サウルはギルガルに向かいました。おそらくその途上で、サムエルがサウルのところに来ました。

サウルは祝福の挨拶をして、「私は主のことばを守りました」と言います。14～15 節。サウルは反自分が主のことばを守ったと本当に思っています。サムエルは続けて主のことばを語ります。

17 節。主の民の王として立てられた者の責任を再び思い起こさせます。18 節。主の命令は、アマレク人を聖絶すること、絶滅させることです。19 節。主の御声に聞き従わなかったことは主の目に悪を行ったことだと言います。

それでもサウルは自分の正しさを主張します。アマレク人の王アガグを連れて来ていますが、他のアマレク人は聖絶しました。分捕り物の中から最上の羊と牛を残しましたが、それは主に献げるためです。他の物は聖絶しました。一部を残したことにはもっともな理由があるというのです。

しかし、命令の一部分に従わないことは、その命令の全体に従わないことです。自分は「だいたい」従っていると思い、それでいいとしていることはないでしょうか。そして、みことばに照らされて自分の不十分さを示されても、自分を正当化して、言い訳していることはないでしょうか。

22～23 節。主にささげ物を献げること自体が否定されているわけではありません。人が主に近づくためには定められた犠牲が必要でした。しかし、主の御声に聞き従うことがなければ、どんな犠牲も役に立ちません。

「聞き従うことは、いけにえにまさる」と強調されています。逆に、「従わないこと」と「高慢」は主の主権に逆らい、自分が中心になることです。偶像礼拝と同じように罪なのです。

さらに、サウルに対して決定的なことが告げられます。「あなたが主のことばを退けたので、主もあなたを王位から退けた」。主がサウルを選んだことで主とサウルの関係が始まりましたが、退けたことでその関係が終わってしまいました。

3. 不十分な悔い改め（：24～25）

ここに至り、サウルは自分の罪を認めます。24 節。聖絶すべきであったのに一部を残したことは罪であったと認めます。そして、そのようにした理由は、「兵たちを恐れて、彼らの声に聞き従」ったからだと言います。サウルは主の御声に聞き従う代わりに兵たちの声に聞き従いました。

しかし、サウルは自分の罪を認めているようですが、罪の恐ろしさを分かっています。25 節。サムエルが見逃せば済むことではありません。罪を赦すことができるのは神だけです。

サムエルは「一緒に帰りません」と言って、離れて行こうとします。それでもサウルはサムエルの上着の裾をつかんで、引き留めようとしています。すると上着が裂けてしまいました。サムエルはこのことが主のみこころを表していると言います。28～29 節。実際に実現するのはまだ先のことですが、主がサウルを王位から退けたことは変更されないのです。神、主は世界の、歴史の主権者です。王を立てるのも、退けるのも主が決定するのです。そして、「偽ることもなく、悔やむこともない」のです。主の定めたことは覆されることがないのです。

それに対してサウルは言います。30 節。「私は罪を犯しました」とか、「主を礼拝します」と信仰者らしいことを言っていますが、サウルは主を敬うのではなく、自分自身が敬われることに関心があります。「私を立ててください」と言います。人々の前で面目を失いたくなかったのです。

そのようなサウルの状態をサムエルは分かったでしょうけれども、考えを変えて、サウルと一緒にギルガルに行きました。おそらくサムエルはサウルのことを心配し、また、サウルが主によって退けられたことが人々に知られた場合の国の秩序のことを心配したのでしょう。

このようにサウルは「私は罪を犯しました」と自分の罪を認めましたが、悔い改めが不十分であったことが分かります。私たちは自分が主のことばに従えなかったときにその自分の罪に対してどのような態度をとるでしょうか。主に背き、主のことばを退けたことが聖なる神の前にいかに大きな罪であるかを認めているでしょうか。その罪を神様に赦していただかなければ、滅びが待っていることを受け止めているでしょうか。

サムエルは、サウルが聖絶しなかったアガグを連れて来させ、アガグを聖絶します。通常の処刑の仕方ではありません。神、主の聖さを表し、主の命令に従うことを心に刻むように示したということなのでしょう。

その後、サムエルはサウルに二度と会うことはなかったということです。そして、サウルのことばで悲しんだとあります。この悲しみは主のみこころを表していたでしょう。「主も、サウルをイスラエルの王としたことを悔やまれた」ということです。主もサウルのことを悲しまれたのです。

主のことばを退けた者を主も退けるといふ厳粛な主のみわざを覚えていなければなりません。聖なる義なる神、主が主権者であることを認めましょう。

自分はだいたい従っていると思い、それでいいとしていることはないでしょうか。そして、みことばに照らされて自分の不十分さを示されても、自分を正当化していることはないでしょうか。主は、私たちの罪深さをすべて分かっておられます。ですから、主の御前に自分の本当の姿を認めることがまず必要です。

主は私たちの罪を悲しんでおられます。しかし同時に神は愛のお方です。神は御子をこの世に与えてくださいました。御父の御心に完全に従われたイエス・キリストの十字架によって、私たちの罪は贖われ、赦していただけます。この神の愛を受け取り、恵みを感謝して、神の聖さを心に留めて、御声に聞き従うことができるように聖霊を祈り求めましょう。